

桜井 良

NPO 法人「社会総合研究所」会員

## 10. イギリス鉄道旅

2018年夏、家族を連れて3週間のイギリス鉄道旅をした。私にとっては、仕事を含めて5度目、妻は3度目、双子にとっては初めてのイギリス旅。前回の2007年は夫婦でスコットランドを旅したが、今回はイングランド南西のダートムアで奇岩(Tor)に登り、中部のStratford-upon Avon(シェイクスピアの生誕地)ではNarrow Boatの船旅を楽しみ、ウェールズでは中世の城に登った。中北部のハワース(Haworth)には2007年6月下旬にスコットランドからの帰りに寄ったが、ヒース(heath)はまだ咲いていなかった。エミリー・ブロンテの『嵐が丘』の愛読者である妻は、ヒースの咲く丘を散策してみたかったので残念がっていた。そこで今回、再訪。ブロンテ姉妹の博物館の裏手から続くヒースの咲く丘を、フットパス(Foot Path)を使って数時間、ゆっくり散策した。

### 国立公園 Snowdonia を横断する蒸気機関車の旅

ウェールズは、私にとって初めて踏む土地。Irish Sea を望むコンウィ(Conwy)に宿を取った。町の標識は、上にウェールズ語、下に英語で書かれている。私が難儀したのは英語の聞き取りだった。ウェールズ訛りが強く、ほとんど聞き取れない。また、ウェールズ語の地名を、私はうまく発音できない。例えば、鉄道中継点Llandudnoは「スランドウドゥノ」、Ffestiniogは「フェスティンヨグ」と発音する。単語の頭が「L」「Ff」など、私が学んだ英語にはないスペルと発音だ。

ウェールズでは、多くのユダヤ教徒を見かけた。黒いスーツを着て顎鬚を長く伸ばし、もみあげ付近で髪を編み、黒い帽子を載せているのですぐ分かる。スランドウドゥノのホームでは十数人もの大家族のユダヤ教徒が、列車を待っていた。何かの拍子に私が大きなクシャミをすると、その家族に大声で笑われた。なぜ笑われたのだろうか。クシャミには、何か宗教的な意味があるのだろうか？

ウェールズは、イングランド王のエドワード一世が13世紀に築いた古城の宝庫である。コンウィ城に登り、町を取り囲むように造られた城壁の上を歩くと、中世にいるような不思議な感覚に囚われる。観光客もまばらで、高い城壁から望めるIrish SeaやSnowdoniaの高原に目を奪われた。

圧巻は高原列車である。コンウィからConwy Valley鉄道に乗ってブライナイ・フェスティンヨグ(Blaenau Ffestiniog)に行き、Ffestiniog鉄道の小型蒸気機関車に乗り換える。森や湖や溪流を縫うように1時間20分も走ると、中継駅のPorthmadogに着く。ここは港町。次の列車までの待ち時間を、カニ採りをしていた家族と一緒に過ごした。そしてWelsh Highland鉄道に乗り換え、国立公園Snowdoniaの山に登り、高原を横断する。天気がよか

ったので窓のないオープン車輻に席を取り、左右に流れる高原、溪谷(Dale)、小川、牧草地に遊ぶ牛・馬・羊、小さな村々、浮かぶ雲、そよぐ風などを満喫した。蒸気機関車はゆっくりゆっくり進む。小川で水遊びをしている地元の家族、ハイキングしている若者、キャンプでくつろいでいる壮年。列車が通ると必ず手を振ってくれた。こちらも負けずに手を振る。思い出に残る高原列車だった。

そして、2時間10分かけて終着駅カーナーヴォン(Caenarfon)に辿りつく。計3時間30分の蒸気機関車の旅だった。



Welsh Highland 鉄道の蒸気機関車が、Snowdonia の高原を走る。

車内でボランティアの車掌さんと一緒に。

Welsh Highland 鉄道では、車掌だけではなく、機関手・線路整備士など、多くのボランティアが支えていた。



### ウェールズのバスの運転手

カーナーヴォンからはバスで中継地のバンガー(Bangor)まで行き、乗り換えてコンウィに戻る。カーナーヴォンから乗ったバスの運転手は、風情から中東出身者のように見えた。ウェールズでは日本人にまったく会わず、また移民らしき人々にも会わなかったのが、私には珍しかった。

約40分でバンガーのバス・ターミナルに到着した。十数人の乗客が降りた最後に、私は運転席脇にある料金箱にコインを入れようとしたとき、運転手に質問された。

「あんたは日本人か？」

「そうです」

「レバノンにいる俺の兄は、去年の冬、北海道のニセコというところにスキーに行った。そこで、日本人にたくさん親切にされたことを感謝していた。俺はそのお礼をしたい。だから運賃は払わなくていい」

「そんなこと言ったって、親切にしたのは、私ではないので払います」

「いや、払わなくていい」

そんな押し問答をしたが、結局、私は払ってバスを降りた。そもそもバス運転手が運賃を払わなくていいと主張すること自体が、考えられない。

レバノンといえば思い出すことがある。2005年から2年間、中国・広東省の深圳(Shenzhen)や東莞(Dongguan)へ品質管理の相談や教育で何度か出張することがあった。深圳には香港から鉄道でも行けるが、私は常宿にしている南海飯店(Nanhai Hotel)が深圳の西端にあつたため、香港国際空港に隣接する海天客運碼頭(Sky Pier)から50分ほどフェリーに乗って后海灣(Deep Bay)を北上し、蛇口(Shekou)の港で降りた。

3度目に行ったときのこと。フェリーの甲板からぼんやりと后海灣や島影を眺めていたら、私の隣で、中東から来たらしい30歳代の男性が、同じようにぼんやりと風景を見ていた。たぶん私は、暇そうな雰囲気を出していたのだろう、その男性が話しかけてきた。彼はレバノン人でアメリカに留学してIT技術を習得。その後、アメリカとインドで仕事をしたが、今度は中国で仕事をするという。レバノンには戻らないのかと聞くと、テロ、シリアとの紛争、イスラーム過激派ヒズボラの台頭など政情が不安定なので、戻らなつもりはないと言い、寂しげな表情を見せた。その表情が、妙に印象に残った。

### 危うくスリに遭いかける

帰国数日前にロンドンに戻り、ヒースロー空港へのアクセスがいいパディントン駅近くに宿を取った。パディントンは、11年前に行った2007年と比べ、アラビア語の看板を掲げた店が軒を連ね、水たばこを吸わせるカフェが数十メートルおきにあった。

この日、私たちはグリニッジ天文台に行き、双子が中学一年の地理で習ったばかりのPrime Meridian(本初子午線)を跨いで、右足は東半球、左足は西半球という貴重な体験(?)をした。また、ハリー・ポッターに登場したKing Cross駅の架空のプラットフォーム9 3/4番線に行き、記念撮影した。



夕方、ホテルに戻るためにメトロ「Marble Arch」駅で降りた。地上に出ると、ヒジャブ

を被った中年のふたりの婦人が、なぜか後から付いてくる。なんか変な感じだなあ？ 2年前のパリでの苦い出来事を思い出した。私は慌てて背負っていたリュックを前に持ち直し、妻にも注意を呼び掛けた。信号が赤なので横断歩道の手前で立ち止まったとき、彼らは私の背後に迫ってきた。私は急に後を振り返り、あなたたちが何をしようとしているか分かっていますよ、という表情し、ふたりの目をじっと睨んだ。するとふたりは踵を返し、次の獲物を狙うためだろう、駅の方角に戻って行った。

### ウィンザー城近くのチョコレート店での甘い（苦い？）思い出

明日は日本に帰るという日、ウィンザー城へ行った。駅構内には、この年の5月、ウィンザー城で執り行われたヘンリー王子とメーガン妃の結婚式の大きな写真が、何枚も掲示されていた。早めに行ったにもかかわらず観光客で混雑し、日差しも強かったので、見学は1時間で切り上げた。

話は、私が23歳だった1971年秋に飛ぶ。ロンドンでの研修の休日、ウィンザー城に行った。城の近くにチョコレート店「Windsor Chocolate House」があり、そこでチョコを飲んだとき、店のおばさんが、私が日本人であることが分かった（1971年頃、ウィンザー城を訪れる日本人は少なかった？）、ご主人と孫娘4人を連れてきて、一緒に記念写真を撮った。そして後日、杉並区に住んでいた私のアパートにその写真が送られてきたのである。店内にも写真を貼ったので、今度また来て欲しいとの手紙が添えられていた。

話はさらに続く。4年後の1975年11月、Mさんという見知らぬ日本の女性から私宛に手紙が届いた。封を切ると、ウィンザー城近くのチョコレート店に入ったとき、私の写真が壁に貼ってあったので、店の人に私の名前と住所を聞き、手紙を書いたとのことだった。便箋を持っていなかったようで、お店の名前の入ったペーパーナプキンを代わりに使い、きれいな筆記体の英文で書いてあった。そして、近々に日本に帰るので会ってみたいと記され、住所も添えられていた。

この手紙は、1971年冬にイギリスで投函され、杉並区のアパートに届いたようだが、私はすでに世田谷区に引越し、さらに勤務地である海老名へと転居していた。つまり、この手紙は4年もかけて私の転居先を追いかけ、1975年11月にやっと手元に届いたのだった。なんとという奇跡。しかし私は、返事を書かなかった。私はすでに結婚し、長男が生まれたばかりだったから。



1971年秋、ウィンザー城近くにあったチョコレート店「Windsor Chocolate House」にて。お店の家族と一緒に撮影。店のおばさんは、右端でチョコレートの詰め合わせを持っている。私は左端。その後、長らく店内に掲示してあったようだ。

そんな思い出があったので、ウィンザー城の帰りに、記憶を辿ってこのお店を探してみたが、見つからなかった。近所のいくつかの店にも聞いてみたが、誰も知らなかった。もう随分も前に、廃業したのだろう。

### タプロー・コート(Taplow Court)にて

ウィンザーからタクシーに乗った。運転手はパキスタンからの移民と自己紹介した。初めに「ロング・ウォーク(The Long Walk)」に行き、並木と芝生に覆われ、遠くまで一直線に続く道をしばらく歩いた。この道は、2022年9月、エリザベス女王の葬儀の際、棺を聖ジョージ聖堂に埋葬するための葬列に使われている。

次に Eton 校を経由してタプロー・コート(Taplow Court)に向かった。ウィンザー北西のメイデンヘッド(Maidenhead)という小さな村に位置する。運転手はこの場所を知っているかどうか不安だったが、しばしばお客を乗せて行っている所だから大丈夫と言った。

タプロー・コートは、テムズ川を眼下に望める丘の上であり、以前は貴族の館だった。現在は、イギリス SGI(Soka Gakkai International : 創価学会インタナショナル)総合文化センターとなっている。ドイツのヴィラ・ザクセンのところで書いた出来事(第2回のエッセイを参照)と同じようなことが、タプロー・コートにもあった。所有者の貴族が館を売りに出したとき、最高値をつけたのはカジノを営む観光業者、最安値はイギリス SGI だった。しかし、所有者は賭博場として使われることを嫌い、文化拠点として使われることを望み、イギリス SGI が落札した。1988年のことである。その後、1996年にイギリスの文化遺産「歴史的建築物」にも認定され、各種展示会や難民救済チャリティー・コンサート、地元の人々の研修施設などとして広く活用されている。



Taplow Court の館内。  
代々の貴族が収集した調度品や絵画を見て回った。

館内に入ろうとしたとき、若い男性とヒジャブを被った若い女性のカップルが目にとまった。案内係の女性が、私たち家族とそのカップルを一緒に案内することになったので、自然と話をすることになった。男性はマレーシアから来た SGM(Soka Gakkai Malaysia : マレー

シア創価学会)の会員と名乗った。旧宗主国イギリスには、マレーシアの優秀な人材をイギリスに留学させる制度があるらしく、この制度を利用してロンドンで勉強している。女性はマレーシアに住む友人で、夏休みを利用して呼び寄せた。マレーシアの国教はイスラームであるが、男性はSGMという仏教徒、女性はムスリマ。こうしたカップルは、今後、どんどん増えていくのだろう。

## 思いがけない再会

私たち家族は、館に数多く残されている数々の名画や調度品を1時間ほど堪能した後、ロビーでジュースを飲みながら、一休みした。ロビーでは十人ほどの人達が、談笑しながらコーヒーや紅茶を飲んでいて、ヨーロッパだけでなく、世界各国から来たような感じを受けた。ひとりの女性は、私たちが小さな子どもを連れた日本人だと分かると話しかけてきた。イギリス旅を話し、ウェールズでは英語の聞き取りに難儀したことを話すと、自分はウェールズ出身といって苦笑いした。隣の椅子に座っていた男性は、ブラジルから来たと言い、昨年、日本に行ったことがあるという。

ロビーの隣には国際会議室があり、何かの重要会議が開かれているようだった。しばらくすると、休憩時間になったからだろう、ドアが開き、様々な国の出席者が三々五々、会議室から出てきた。私はどんな人達なのだろうと思い、それをぼんやりと眺めた。その中に、気品をたたえた初老の日本人の婦人がいる。・・・アレ!? なんかかすかに見覚えあるなあ・・・どこかで会ったような・・・記憶を辿る。・・・あつ、思い出した、Fさんだ・・・ちょっとふくよかになったけど。私は驚くと同時に歓喜し、その女性の前に進み出た。彼女は一瞬、驚いたような、そして怪訝そうな表情をし、私の顔を見つめた。私は、髪はすっかりなくなってしまったが、若い頃の体形を維持していた。次第に私が誰なのかなんとなく分かったのだろう、かすかに私の名前を呼んだ。「・・・り・よ・う・くん??・・・りょうくん??・・・良くんでしょ!!」。「そうです、桜井良です」。私は妻の前であることをすっかり忘れ、満面の笑みで彼女の手を取り、両手で熱く握った。懐かしい、本当に懐かしい。

Fさんについては、第1回目のエッセイで触れたが、1970年8月、UCLA(University of California at Los Angeles)のEnglish Summer Seminarで十数人の同じクラスとなった。私はすでに社会人だったが、彼女は未来に燃える大学生。休日には一緒にアナハイムのディズニーランド(当時、まだ東京ディズニーランドはなかった)で遊び、夜には野外演劇場Hollywood Bowlでフランク・シナトラの「Fly me to the moon」を聴きに行った。日本に戻ってからも手紙のやりとりは続き、大学卒業後に入社した出版社で初めて手掛けた本・・・それは環境問題を扱う本だった・・・をプレゼントされたこともある。しかし数年後に西ドイツ(当時)に渡り、やがて永住権を得、平和活動家としてヨーロッパを舞台に活躍してきた。彼女が日本を離れてから、44年の歳月が流れていたのだ。

Fさんに家族を紹介した。ふたりの孫娘が双子であると話すと、Fさんは少し驚いた表情をした。ちっとも似ていないから。そこで私は、半年前までは見分けがつかないほど似ていたが、妹が病を発症し、その治療のためにステロイド系の薬を服用しなければならなくなったこと、その副作用でムーン・フェイス(Moon Face)になり、体重も増えて丸みを帯びた体形になってしまったことを話した。しかし、この病気を契機に、妹は自分の病気を自覚し、前向きな姿勢に変わってきたこと、何事にも積極的になってきたことを付け加えた。すると

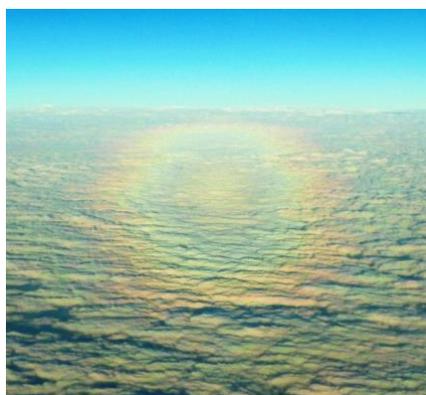
真剣に聞いていたFさんは、妹の目を見ながら、病気を契機に人生を見つめ直し、立ち上がった人はたくさんいること、希望を持った生き方をすればなんの心配もないこと、病気は必ず克服できること、そうした励ましの言葉を妹に贈った。

再会は15分くらいではなかったか。Fさんはもう一度、私と妻と双子と手を握り合い、そして笑顔をとたえたまま、会議室に消えていった。

Fさんと一緒に、皆、満面の笑み。Taplow Courtのロビーにて。



こうして楽しい思い出を抱え、私たちは帰国の途についた。それを祝福するかのように、帰りの飛行機の窓から、太陽が雲や霧に反射してできる光輪（ブロッケン現象）が見えた。



飛行機の窓から撮影。私は初めて見る荘厳な光景だった。

## 11. 対談集『平和の哲学 寛容の精神 イスラームと仏教の語らい』から

2019年12月のエジプト旅（2021.7月に「サブ添乗員のエジプト旅」として掲載させていただいた）を最後に、私たちは海外旅行をしていない。そして、コロナ禍の中、私は後期高齢者となった。3歳年下の妻は、70歳を過ぎてから病気や怪我が続き、体力の衰えは隠せない。海外旅行はもう無理だろう。高校生となった双子の孫娘は、家族旅行より友人と過ごすほうが楽しいらしい。妹の病は収まって薬の服用はなくなり、体形も元に帰り、近所の人も間違えるような瓜二つの双子に戻った。

しかし、少年時代に抱いた夢は、ほんの一部しか実現していない。どうしても行きたい町

のひとつはイスタンブール。ビザンチン文化とイスラーム文化の融合した都市。行ってみたいなあ!! 果たせない夢になるだろう。

さて、これまで5回にわたって長々と還暦後の旅先での個人的体験や小さな出会いを書いてきた。私は何の偏見をもたずに、出会った人々と接してきただろうか？

インドネシア共和国元大統領であり、インドネシア最大のイスラーム団体ナフダトゥール・ウラマの議長を務めた(故)アブドゥラフマン・ワヒド氏と池田 SGI 会長との対談集『平和の哲学 寛容の精神 イスラームと仏教の語らい』(潮出版社)の中で、池田 SGI 会長は、歴史学者アーノルド・トインビー博士の次のような主張を紹介している。

“私の経験では、伝統的な偏見を徐々になくしてゆくのは、個人的な付き合いであった。どんな宗教、国籍、あるいは人種の人々とでも、その人と個人的に付き合い、かならずその人が自分と同じ人間であることがわかる。” (156 ページ)



『平和の哲学 寛容の精神 イスラームと仏教の語らい』の表紙。潮出版社。

還暦までの私は、イスラームに対して偏見を持っていたと思う。しかし、近所で、また旅先で、上辺だけの付き合いであったとしても実際に会って話をすると、当たり前だが、同じ人間だと思う。トインビー博士のこの言葉の意味が少しだけ理解できる。

この対談集の中から、私が同意するワヒド氏の発言をいくつか紹介し、それをもって「還暦を過ぎた旅と小さな出会い」の終わりとした。

“イスラーム自体、人間に戦争することを提案していない。人間が戦争をするのである。私は、非暴力のガンジー主義を支持している。世界のイスラームの指導者が集う国際会議を主催しながら、西欧諸国を中心に広がるイスラームへの誤ったイメージを変えていきたいと願ってきたのです。” (15 ページ)

“1945年にわが国で憲法を制定するにあたり、「イスラームを国教にすべきか否か」が大きな争点となりました。そのとき、(ワヒド氏の)父を中心とする人々が「いずれの宗教も互いに尊重し合うべきである」と訴え、「信教の自由」を保証する内容が

憲法に加えられたのです。”(47 ページ)

“(なぜイスラームがインドネシアに受け入れられたのかという池田氏の質問に対して) さまざまな要素があるでしょうが、イスラームが説く「平等性」と「寛容性」が大きいのではないかと思います。それは、多様性を尊ぶ、わが国の精神伝統とも合致するものでした。イスラームでは、人々の間に身分や階級の違いはないと説きます。

(中略) また『クルアーン』には、「あなた方には、あなた方の宗教があり、私には私の宗教があるのである」との教えがあります。預言者ムハンマドは、意見の相違を尊重したのです。こうした教えがあるからこそ、私は、どのような宗教的背景や思想的背景を持つ人とでも、意見交換ができるのです。”(143 ページ)

“(イスラームの最初の信徒になった妻ハディーシャについて述べた後) 最後までイスラーム教徒にならなかったものの、終生、ムハンマドを守り支えぬいたのが、叔父(ムハンマドの育ての親)のアブー＝ターリブでした。ムハンマドもまた、その叔父と一緒に生き、とても大切にしていました。ムハンマドは多元性に生きることに慣れていたのです。他にも、キリスト教の三人の牧師がナザル(サイジアラビアの東にある州)から来たとき、ムハンマドは彼らに対して、モスクで彼らの宗教の務めを行うように求めたという話が残っています。(中略) イスラームの教えでは、たとえ信じる宗教が違ったとしても、同じ人間として尊重しなければならないという寛容の精神を説いているのです。”(167 ページ)

“1994年11月に東京で行われた国際シンポジウムで『文明の衝突』の著者サミュエル・ハンチンソン氏と会い、話をした。ハンチンソン氏は、冷戦後の危険な対立は文化の対立、それはキリスト教とイスラーム教の対立に沿って生じるだろうという主張をした。それに対し、私はシンポジウム場で、「文明と文明との間にみられる差異は、本来、衝突するか否かの問題ではない」と申し上げました。「生活様式の違いが衝突の原因になるのではなく、政治・経済的利益が引き金になる。問題は、一つの文明が自らの価値観を他の文明に押し付けようとする場合だ。そういう試みは成功しないだろう」と。文明が異なっても衝突する必要はないのです。仮に衝突が起こったとしても、それは差異というより、無理解や偏見に基づいたものに他なりません。”(195 ページ)

“(このワヒド氏の主張を受けた池田氏の発言) ハンチンソン氏が『文明の衝突』を発表したのと同時期(1993年9月)に、ハーバード大学から招聘をいただき、『二十一世紀文明と大乘仏教』と題して、二度目の講演を行いました(注:この講演を塩尻ご夫妻は聴講されている)。そこで私は、文明間の対立の要因は宗教にあるとのハンチンソン氏の見解とは立場を異にし、差異へのこだわりの克服こそ、世界宗教への跳躍台であり、「開かれた心」による「開かれた対話」こそが、二十一世紀の宗教に欠かせない要件であると訴えたのです。”(196 ページ)

池田 SGI 会長は『二十一世紀文明と大乘仏教』の講演の中で、インドの釈尊の「私は人の心に見がたき一本の矢が刺さっているのを見た」という言葉を引用している。「一本の矢」とは「差異へのこだわり」を指す。そして、次のように述べている。

“民族であれ階級であれ、克服されるべき悪、すなわち「一本の矢」は、外部というよりも自分の内部にある。ゆえに、人間への差別意識、差異へのこだわりを克服することこそ、平和と普遍的な人権への第一義であり、開かれた対話を可能ならしむる黄金律なのであります。”

2022 年 11 月、フィリピンのグシ平和賞委員会は、塩尻和子氏の平和的な宗教間対話の推進とイスラーム理解への貢献を称え、「グシ国際平和賞」を贈った。その背景には、氏の学術的な業績だけではなく、氏が長くアラブの地にあって「(イスラームに対する伝統的な偏見を徐々になくしていったのは)どんな宗教、国籍、あるいは人種の人々とでも、その人と個人的に付き合えば、かならずその人が自分と同じ人間であることがわかる」と言うトインビー博士の経験を、無数に積み重ねてきたからだと思える。

宗教間対話は、宗教が先にあるのではない。教義が先にあるのでもない。人から始まるのだ。より広く世界を学び、人を理解し、友好を結び、信頼関係を築いてこそ、宗教間対話が可能となる。対話の目的は、対話ができるという信頼の構築にあるのだと思う。合意を得るための手段ではない。

私にも当然、差異へのこだわりもある。どうしても嫌いなこともある。しかし、SGI という世界の中で、偏見という名の差異を乗り越える大切さを学んだ。(完)

(桜井良さんの暖かいエッセイは、もっと長く続いて、いつも私たちの心を温めて下さるような気持ちでございましたが、この心温まるエッセイも、今月号で最終回になりました。桜井さんには、また、何かのテーマで私たちを元気づけてくださるようなエッセイをお送りいただけますように、お願いいたします。

また、この号の最後に、桜井さんから、私の「グシ国際平和賞 2022 年」について、お祝いのお言葉をいただきました。実は、それ以前に「創価学会インタナショナル」の池田大作会長も 2016 年にこの平和賞を受賞されています。私よりずっと早い段階でこの賞を受賞されていますので、まずは池田会長の受賞をお知らせすべきところ、私の受賞をご報告いただき、大変恐縮なことでした。塩尻和子)